浦賀文化

平成23年（2011年）10月1日

第27号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

浦賀八景（下）

前回に続き、浦賀八景の残り四カ所の漢詩をご紹介します。

●扇海秋月（せんかいしゅうげつ）「扇海の秋の月」

潮拍両崕月湧流
白扇倒頂総房幽
若令王粲乗暗夜
撑着珊瑚枝上秋

潮は両崖を拍ち、月は流れに湧く／白扇、頂を倒にして総房幽かなり／若し王粲をして清夜を乗らしめば／珊瑚枝上に秋を撑着せむ。

○白扇倒頂＝秋月は中天高く冴えわたり、月影が扇海の水面に倒さに映える情景の表現

○王粲＝古代中国、魏の詩人（一七七～二一七）

○撑着＝ささえる

※浦賀の港が扇を開き始めた形に似ているため扇海と呼ばれた。

●芝生落雁（しぼうらくがん）「芝生にまい降りる雁」

似尋曽宿処　断続下斜暉
芦荻花開岸　相呼不敢飛

曽宿の処を尋ぬるに似て／断続して斜暉に下る／蘆荻の花、岸に開き／相呼べども敢へては飛ばず。

○曽宿＝前にねぐらのあった

○斜暉＝夕日の光

○蘆荻＝あし、おぎ

○不敢飛＝むりに飛ぼうとはしない

※芝生は浦賀駅前から馬堀海岸へ向かう矢ノ津坂の手前の地域である。

●尾村夕照（おむらせきしょう）「尾村の夕ばえ」

楓葉江村外　影浸潭底寒
斜陽相映処　誰作蜀川看

楓葉、江村の外／影は潭底を浸して寒し／斜陽の相映ずる処／誰か蜀川と看るをなす

○江村＝入江沿いの村

○潭底＝深く水をたたえた淵の底

○斜陽＝夕日

○蜀川＝中国四川省を流れる錦江。蜀江錦（蜀の錦江の水で糸をさらして織った美しい錦）は紅葉の美しさにたとえられる

○作…看＝…とみなす

○尾村＝大室の里。明神山東南麓

※尾村とは東浦賀と鴨居を結ぶ海岸線、現在のかもめ団地にある大室（おおむらと呼んでいる）を指していると思われる。

●平根暮雪（ひらねぼせつ）「平根山の夕暮れの雪景色」

一片雪陰鎖暮寒
海風捲上碧層巒
欄前莫対平根興
不若此峰落日看

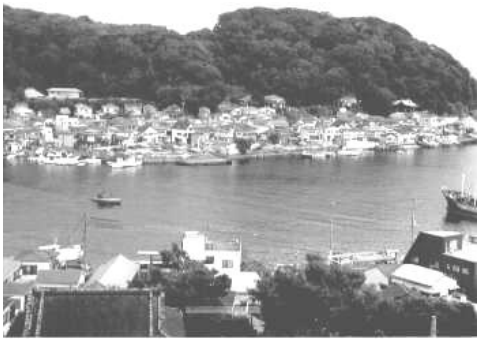
一片の雪陰、暮寒を鎖す／海風、土を捲く碧の層巒／欄前、平根に対して興ずるなかれ／若かず、此の峰の、落日を看むには―。

○雪陰＝雪ぐもりの空

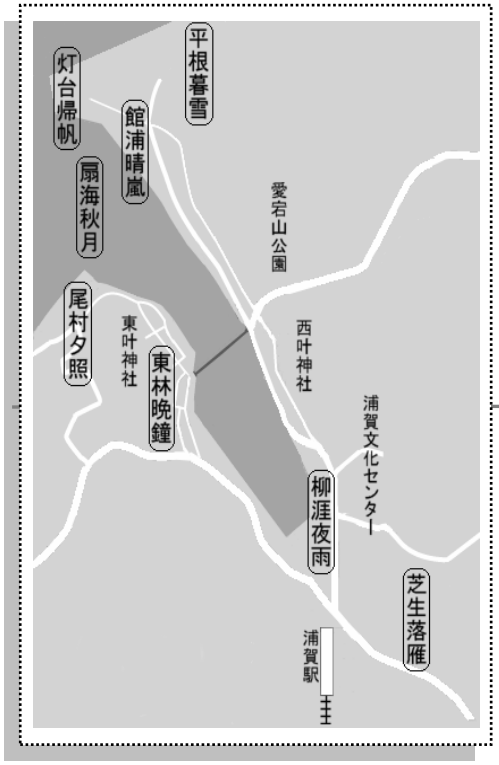
○層巒＝めぐり連なる山

※燈明堂から平根山の夕暮れの雪景色を詠んだもの。

たった百年あまりの間に「浦賀八景」はほとんど姿をかえてしまいましたが、現在でも桜満開の愛宕山や、冬晴れの日の渡し船から見る燈明堂等は捨てがたい浦賀の景勝だと思います。自分だけの「新・浦賀八景」を探してみませんか。



愛宕山から見た浦賀港と東浦賀



浦賀八景案内図

★参考資料
・東叶神社記念誌「ひむかしの丘」　永井　不士男著
・歴史のまち浦賀てくてくガイド　浦賀歴史研究所著
・横須賀むかし話　塚越英男編著

歴史 語らい座 ・ 浦賀 二十七

郷土史家 山本 詔一

●奉行の急病●

文化三年（一八〇七）正月十八日、前年三月、十七代目の浦賀奉行になった酒井近江守忠頼は、浦賀での正月の公式行事が済み、浦賀奉行所の出先機関がある下田御用所への視察巡見に出発した。

浦賀奉行所は、御役所（浦賀奉行所）、御番所（船番所）、江戸御役所（江戸の奉行の自宅）、三崎御役宅、下田御用所の五つの役所から構成されていた。

酒井奉行が目指した下田御用所は、初期のように借家ではなく、鵜島というところに独立した建物があり、同心三名がおよそ百日交代で勤務することになっていた。その仕事は廻船が事故にあったときの処理や浦賀番所で船改めを受けない「乗り落とし」と呼ばれた船の処置を行っていた。その範囲は下田町、須崎村、柿崎村、外浦の浦方役所であった。

浦方とは海に関することをいい、岡方（地方）とは陸地のことをいう。下田周辺の地方支配は、代官・江川太郎左衛門であった。このような海と陸が二重支配になっているところは、そこに住む村人を始め、支配する役人にも独特な心理的負担を与えていたし、双方の役所間でも微妙な摩擦が生じていた。

例えば、水死体が海にある時は下田御用所の管轄であるので、その事件性や身元の所在などを調査したが、この水死体が海岸に打ち上げられると下田御用所では手を出すことは出来なくなり、江川の代官所がその調査をすることになった。

酒井奉行の旅立ちは早く、正月十八日の明け方といっても夜明け前の午前三時ごろであった。歌に「お江戸日本橋七つ立ち・・」というのがあるが、これが午前四時ごろであったので、それよりも早い出立であった。それでもお奉行の旅立ちとなれば、奉行所の役人はもちろんのこと、東西の村役人、廻船問屋、御用達の商人、医師までもが見送った。なかでも同心三人と村役人、問屋の代表者は大津村まで見送りに行っている。

ところが、午前十時を回ったころ、「お奉行様、御病気につき、藤沢宿から引き返す」という連絡が入った。

現代なら携帯電話という便利なものがあるので、現状を報告しながら帰浦することができるが、当時はどのようにしたのであろうか。この史料を掲載している『浦賀奉行所関係史料・臼井家文書第一巻』によれば、「三方問屋（船改めを業務とする東西浦賀と下田問屋の総称）はなるたけ先まで三、四人ずつ出迎えを出すようにし、仕度の出来た者から出発させた」と記されている。

これから推測するに、戻ってくる奉行の行列にたどり着いたら、速やかにその状況を把握して、その旨を浦賀へ連絡をさせたのであろう。これを「先触れ」というが、先触れは通常でも奉行の行列ぐらいになると、どの宿場では「お茶」、次の休憩場所はどこ、宿泊はどの宿場のどの宿屋ということを事前に連絡しておくシステムをいった。

この場合は非常事態であったので、より多くの人がその役目を負い、刻々と移り変わる状況を浦賀へ人海戦術をとったのであろう。

酒井奉行は、無事浦賀までは辿り着いたものの、病状は芳しいものではなく、江戸へ戻って養生を期待していたが、この年の五月辞表を提出し、受理された。

◇鏝絵展示のご案内◇

現在、浦賀コミュニティーセンター分館では、西浦賀の左官職人・辰巳忠志さんが制作した鏝絵を数点、定期的に展示しておりますので、是非見学においでください。

鏝絵
「夫婦鶴」

笑話一題

ついに初救急車・初入院を経験してしまった。

週末からどうも体がフラフラするなぁ、と思ってはいた。ただ特に気になるほどではなかったので、普通に生活していた。

ところがある日、退社時刻近くになって急に体がフラフラしだし、汗が止まらなくなった。真っ直ぐ歩こうとしても真っ直ぐに歩けない。家に帰ってからは吐き気がひどく、食事を取る気が起こらない。

これはおかしいということで次の日の朝、耳鼻科に行ったところ、瞳孔が左右に揺れているということで、救急車に乗せられ即入院となってしまった。

病室は当然大部屋だった。

こちらはめまいや点滴で動くこともままならず、日中も横になっているしかやることが無い。昼間寝ているため夜消灯時間になっても、すぐに眠れない。しかも部屋の外では急患やナースコールの音が鳴り響き、また同室の方もいびきがすごく、寝そびれると全然寝られない。

ベッドの上で自宅の方が良いなぁ、早く退院出来ないものかといつも考えていた。

やはり健康には気を付けなければと再認識した。

十月十日～十月十六日は「四十歳からの健康週間」。皆さんも健康には気を付けて。

発行：浦賀行政センター　編集：浦賀コミュニティセンター分館（浦賀文化センター）
〒239-0822 横須賀市浦賀７－２－１　電話番号：046-842-4121　休館日：年末年始